

総括

アジア産業研究センター研究員／専修大学大学院商学研究科長・商学部教授

渡辺 達朗

渡辺達朗と申します。本日はご参加いただきましてありがとうございます。

本日の講演は3つそれぞれ異なるタイプの報告でしたので、全体を通じての総括をすることは難しいのですが、最初の岩尾教授からの報告は、ベトナムを中心にしたロジスティクスがメコン地域でどのような方向で発展しているのかに注目したものでありました。2つ目のカストロ先生のご報告は、ASEAN 地域における輸送（トランスポートーション）ということで、どちらかといいますと、統合を目指してトランスポートーションの仕組みはどうなっていくのかという話だったのに対して、最初の岩尾教授のお話は統合に向けた動きもあるけれども、それぞれ地域ごとの違いもあり、そうそううまくいかないのではないかなというような見方もあったのではないかと思います。そして最後のマシュー先生のご報告では、ラオスに注目されて、現地の伝統的な culture がオーストラリアの企業によってどのように変容していっているのかというご報告だったと思います。

全体を通じて何が言えるかというのはとても難しいのですが、それぞれ文化も違えば経済の発展段階も違い、宗教も違うような中でASEANの統合がどのような方向に向かっているのかということです。ASEAN 統合については、公式に各国政府が言っているけれども、現実を見ると物流1つ取り上げてみても右側通行と左側通行があって国境での荷物の積み替えが必要だったり、あるいはトラックのヘッド部分の取り替えが必要だったりしています。そういったことがありながらも、規制のバリアを下げたい部分については下げながら統合していくという方向に向かっているのだと思います。

ただ、先ほどのご質問の中にもありましたように、国民投票によってEUからイギリスが離脱するという結論が出されて、もともと違う背景を持つ国々が統合していくことの難しさをあらためて痛感しているわけですが、そういった中でASEANがどういう方向に向かっていくのか、そしてそれぞれの独自性を持ちながら統合の方向性を持っているASEANに対して日本としてどう関わっていくのか、あるいは我々は中小企業を中心にしているわけですが、そういった日本企業がどういう形で今後ASEANにおいて展開していくのか、それを我々は学術的観点からどう支援していくのか、そういったことを今後も継続して見ていきたいと思っております。

ちなみに、去年、中国の雲南省の百貨店企業がラオスに進出していくという話を報告させていただきましたが、実際、1年後ラオスに出店されたそうです。そして出店にあたっては日本の三菱商事と連携し、雲南省とラオスとの物流だけではなく、それを日本との関係で三菱はどう考えるかということにも取り組んでいるという話をつい1カ月前にその関係者からおうかがいしました。つまり、経済の発展地域であるASEAN・メコン地域を中心にして、中国、日本、オーストラリアといった周辺の国々がどういう形で関わっていくことになるのか、それを自国の今後の発展・展開においてどう位置付けていくのかということについてそれぞれがにらんでいるような状況にあります。

そういったことを勘案しますと、非常にエキサイティングな研究課題でありますし、これからも注目していかなければいけないと考えております。我々のプロジェクトはあと2年ございますので、また違う観点からご報告をさせていただく機会を持ちたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いたします。

本日はありがとうございました。